シリーズ 国際人権・随想⑤⓪

アジア諸国と人権（その四二）

研究センター所長
京都大学名誉教授
安藤 仁介

カンボディアはこうしてタイ、ヴイエトナム双方から浸食されますが、一九世紀にはフランスがインドシナに進出し、一八六三年にカンボディアを保護領とします。しかし王政はそのまま存続し、一九四一年にノロドム・シアヌーク国王が即位します。ただしシアヌークは四五年、日本軍の仏印進駐・植民地政府解体に伴い、独立を宣言し、四九年の日本軍撤退後は、まずフランス連合内で限定独立、ついでフランスと交渉して五三年には完全独立を達成します。シアヌークは五五年、王位を父スラマリットに譲り退位、六〇年、国家元首に就任し、六四年には社会主義体制に移行して、ヴイエトナム戦争では解放戦線を支援しました。ところが、一九七〇年シアヌークの外遊中に、親米派のロン・ノル元帥が政権を掌握し、国名をクメール共和国と改めて共和制に移行、七二年には大統領に就任したのです。シアヌークは北京に亡命し、七〇年にカンボディア民族統一戦線を結成して、右派との内戦が勃発します。

この間、七五年には共産党がプノンペンを陥落させ実権を掌握、翌年ポル・ポト党書記が首相に就任し、極端な無差別平等イデオロギーのもとで、私有財産廃止、都市住民の農村移住・農耕強制を実施し、不服・不平者は拘束・拘禁さらには処刑に踏み切り、カンボディアの人口を二百万も減少させた、といわれています。

七九年、ポル・ポト派に対する国民の不満を背に、ヴイエトナムが軍事介入し、ポ・ト派に圧勝、ポ・ト派はゲリラ戦に転じましたが、九〇年代には主要な指導者の離脱・死亡などにより事実上消滅しました。

このように内戦が続く一方、王派の民族統一戦線、親米右派、親ヴイエトナム人民評議会（人民党）、ポ・ト派の四者は、八八年ジャカルタで非公式協議を開始したが中断。ただしヴイエトナム駐留軍がカンボディアから撤退。そのなかで、国際連合安全保障理事会の五常任理事国が、カンボディア最高国民評議会の設置と総選挙実施など、和平の包括的枠組みを提示し、四者もこれに合意して「カンボディア紛争の包括的政治解決に関する協定」（パリ和平協定）が成立しました。

同協定の実施を担保するため九二年、国際連合は二万四千人の要員派遣を決定し、明石康・国連事務次長が国連暫定統治委員会（UNTAC）代表に着任されました。UNTACは九三年に、まず憲法制定会議を実施しましたが、ポ・ト派はこれに参加せず、会議ではシアヌークを国家元首に選出して、共同首相制が発足しシアヌークの息子ラナリットを第一首相、ヴイエトナムを後ろ盾とするフン・センを第二首相とする連立政権が発足しました。ただし、ラナリットはポ・ト派と通じた罪で有罪とされましたが、恩赦で帰国を許されました。二〇〇六年には、新生カンボディア初の自前による総選挙が実施され、人民党が勝利して、フン・セン長期政権が成立しています。

以上の流れのなかで、ノロドム・シアヌーク（二〇一二年、亡命先の北京で死去）の役割は見過ごすことが出来ませんが、彼にはオポチュニスト的な側面があり、王政を維持しようとしていたことが認められる一面、社会主義的な制度を導入するなど、本当に何を国家の最終的な目標としていたか、不可解な点が残ります。その解明には、おそらくかなりの時間が必要でしょう。

なお現在でも「カンボディア王国（Kingdom of Cambodia）」が正式な国家名です。